

## 文学博士中西進君の「万葉集の比較文学的研究」、 「万葉史の研究」

### に對する授賞審査要旨

文学博士中西進君の著書「万葉集の比較文学的研究」(昭和三十八年一月刊)とその続篇「万葉史の研究」(昭和四十三年七月刊)は万葉集研究の多年にわたる成果としてすぐれた業績である。

「万葉集の比較文学的研究」は万葉集における中国文学からの影響を主として扱い、「万葉史の研究」は万葉集の歌の史的展開を考察しているが、互に関連がある。「万葉集の比較文学的研究」は一、序論、二、作家論、三、作品論、四、主題論、五、終論からなっている。序論において万葉集の比較文学的研究に關する内外諸家の説を挙げ、その方法を説いている。著者によると、比較文学を両国間の文学の交流のみに限定せず、万葉集の研究の一方法と考へ、目的とする所は万葉集の文学的形象を明らかにするにあるとする。従つて縦の關係をも配慮しつつ横の影響を摘出することによつて万葉集のとり入れたものが明らかにするのは、万葉集自体の文学研究として意義があるとしている。万葉集の時代区分としては伝誦歌の時代、万葉集の誕生時代、宮廷歌の時代、和歌拡大の時代、抒情歌の完成の時代としているが、伝誦歌の時代は主として記紀歌謡をさしているから、万葉歌を四期にわかつことになる。また万葉集の中には様々な場と性格とをもつた歌が収められているが、それらを宮廷歌と民間歌にわけられるとし、各時代において中国文学特に六朝や唐の詩からどのように影響されたかを、個々の問題を取りあげて具体的実証的に考察している。作家論では伝誦の作家たち、雄略御製の伝誦、近江朝作家素描、額田王論、人麻呂と海彼、長屋王の生涯とそ

の周辺、詩人・文人、六朝風―旅人と憶良、都府文学の形成者、梅花の宴群像、家持ノートにわけて考察し、作品論では万葉歌の誕生、辞賦の系譜、長歌論、戯歌、詠物歌の位置、作品成立の背景、末期万葉の形相、万葉集の編纂の諸問題を考察している。主題論では吉野で詠んだ歌の問題、仙柘枝歌、竹取翁歌論、七夕歌群、鎮懐石伝説を比較文学的に扱い、また黒髪や月舟を詠んでいる歌、水辺の婚やカルデアの知識（上代作品に見える七日の問題）をとりあげて中国文学からの影響を明らかにしている。終論において万葉集を構築せしめたものは文選や玉台新詠等の六朝文学であるが、わが国の伝統として受けた文学的資質を拡大せしめる以上には中国文学は影響し得なかったとしている。

「万葉史の研究」は、一、序論、二、万葉の古代、三、七世紀の万葉、四、人麻呂とその周辺、五、八世紀の万葉、六、万葉の開花、七、山上憶良、八、赤人、九、万葉集と漢詩文、一〇、鄙とみやび、一一、女歌、一二、大伴家持、一三、終論からなっており、各編を更に数章にわけて扱っている。序論では文学史を文学の伝統の継承であるとし、更に研究者個々人の思惟によるものであるから、厳密に言って客観的な文学史はあり得ないとする。そして古代文学史、特に古代和歌史の研究として第一に文学史における古代の意味をとき、第二に海外文学との交渉を明らかにし、第三に和歌の位置を明らかにするとする。そうして文学研究の方法としての比較文学研究も事実の上の関係とともに作品の価値を考えるべきであるとする。更に万葉史と時代との関係をととき、万葉史の素描として万葉の歌は女歌からはじまって女歌に至るとしている。これは前著で扱った民間歌と宮廷歌との問題を別の角度から発展せしめたのである。女歌は私歌であり、褻の歌であり、民間歌と通ずる。男歌は公歌であり、晴の歌であり、宮廷歌と通ずるものがある。万葉の歌は女歌、即ち私歌からはじまって公歌となり、更に私歌となったのが著者の根本的な見

方となっている。

その見地から本論の諸章において万葉の歌の展開を考察し、歌の詠まれた場と関連せしめながら扱っている。そうして万葉初期の私歌から出発し人麻呂以降、私歌から公歌への展開となり、末期万葉において再び私歌の世界に戻ったとし、各時代における作家作品を通して具体的に考察している。それは万葉の内面的なものの展開であるが、表現や詞の上でも六朝や唐の詩との関係を明らかにしている。ここに前著の研究を基礎としつつそれを進展させ、文学の本質の問題に深化させていると言える。

両書併せて万葉集の研究に新生面を開いており、新見解に充ちている。たとえば前著の中、「辞賦の系譜」において六朝の辞賦の影響が人麻呂の歌に著しいとする見解など比較文学的に精細な調査を行ない創見が多い。後著の中、「人麻呂とその周辺」において人麻呂が歌謡語を継承している点を精細に考察しているのは、前著のそれと併せて人麻呂の全貌を明らかにしており注目される。

また「山上憶良」において憶良が遣唐小録として唐に在った頃の状態を長安の憶良として種々の方面から精細な考察を行なって創意にみちている。一面に結論を急いで考察の余地のある点もないではないがその場合にも著者の鋭い着眼点には示唆されるものが大である。万葉集研究において本書は画期的な意義を有する業績であることは明らかである。